

## 平成26年度 部局自己評価報告書（文学研究科）

**Ⅲ 部局別評価指標****1 東北大学グローバルビジョンにおいて各部局が定めた「部局ビジョン」の重点戦略・展開施策または部局第2期中期目標・中期計画における特色ある取組の進捗状況と成果****※ 評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容**

1. 教育のグローバル化の推進
  - ・ダブルディグリー制度を見据えた部局間学術交流協定を、モスクワ大学心理学部、ヴェネツィア大学、ナポリ東洋大学との間で締結し、フィレンツェ大学との大学間交流協定に参加した。
  - ・平成25年度から留学生の受け入れプログラムに積極的に応募し、「複数領域横断型日本学研修プログラム」「国際交流基金 KAKEHASHI プロジェクト」に採択されたことでライデン大学・ローマ大学・ナポリ東洋大学・ヴェネツィア大学・アリゾナ州立大学などの欧米諸国からの学生を受け入れた他、東北多文化アカデミーや国際交流基金関西国際交流センターと連携協定を締結したことで、吉林大学と上海海洋大学からの計33名を特別訪問研修生として受け入れた。
  - ・学士課程最終学年在籍者における3ヶ月～1年間の留学経験学生数は、当初目標の6名をはるかに超えて26名に達した。また平成26年度の1年次学生のTGL登録率は全学トップの33.2%で、今後派遣留学生の大幅な増加が予想される。
2. 人文社会科学をイノベーションする分野横断型の新たな学問の創出
  - ・昼食時に、研究科内教員が回り持ちで最新の研究発表を発表して意見交換をする「メレンダセミナー」を平成25年度も継続し、計8回のセミナーを開催して教員間の研究交流を深めた。
  - ・思想史や美術史が核となり、文化人類学、宗教学、工学研究科の都市・建築学専攻、さらには学外の建築史等の研究者まで巻き込んだ「空間史学研究会」は、2回の研究会、1回のシンポジウムを開催し、11月に『空間史学叢書1 痕跡と叙述』（岩田書院）を刊行した。
  - ・哲学、倫理学、社会学などを中心に、地理学、農業経済学など他研究科教員で構成される「3.11以後のwell-being研究プロジェクト」は、科研費基盤(B)「自然観の展開と人間的営為の運命に関する思想史的・応用倫理学的研究」の活動を柱に、生命倫理学の第一人者である高橋隆雄熊本大学教授を招聘し、熊本県の地域密着型のケア枠組みを事例に検討した。
3. 文学研究科のもつ知的資源の社会への還元
  - ・教員による平成25年度刊行の著作数は57冊、論文数は179編、国内・国際学会などでのシンポジウムの基調講演や口頭発表が221回、そして公開講座などでの講演が124回に上っていた。
  - ・例年通り、「有備館講座」（受講総数：193名）、「齋理蔵の講座」（同：137名）、「みやぎ県民大学」（同：45名）、「紅葉の賀」（参加者：290名）、「東北文化公開講演会」（同：50名）などを開催し、研究科教員のもつ専門性の高い知的資源を社会に発信すると共に、「第6回青春のエッセー阿部次郎記念賞」（応募総数：165件）を公募し、優秀な作品を文学部として顕彰した。
  - ・多くの教員が市町村レベルから国レベルの博物館、美術館などの運営に関わっている他、文化財の調査・保護や県史・市町村史の編纂などに従事しており、そうした活動を通じて、専門的知見の社会還元が実現されている。
  - ・高校からの出前授業の依頼に対し、平成25年度には15校に講師派遣をした。
4. 効果的コミュニケーションのための統合的言語研究
  - ・科研費基盤(S)受給中の言語学、東北大学方言研究センターを擁する国語学、多文化対応の人材育成で実績のある日本語教育学を柱とした本研究プロジェクトでは、これまで独立的にそれぞれの分野で効果的コミュニケーションの問題を扱ってきたが、平成25年度からは統合的検討の機会を設け、平成27年度以降に国際シンポジウムを準備中である。
  - ・方言研究センターでは、東日本大震災の被災地に特化した視座から方言研究を意欲的に推進しており、被災地の住民と外部支援者との間の方言をめぐるコミュニケーションギャップに関する報告書を作成し、被災地支援に役立っている。
5. 「臨床宗教師」養成プログラムの開発と社会実装
  - ・二年目が終わった「実践宗教学寄附講座」は、四回の「臨床宗教師」研修で57名の修了生を輩出した。うち3名が常勤の「臨床宗教師」として病院などで雇用され、他の多くの修了生もこれまで通りの宗教者の業務に加え、非常勤やボランティアの「臨床宗教師」となっている。
  - ・本学を核とした「臨床宗教師」ネットワークが始動し出し、龍谷大学・鶴見大学でもその養成

コースが開始され、さらには上智大学・高野山大学・種智院大学などでも平成 27 年度以降の設置が目指されており、本学が先鞭を付けた「臨床宗教師」の社会実装の道が現実化し始めた。